

『マビノギオン』の女性像をめぐって（2）

——民話とロマンスの中から——

中野節子

意中の恋人ダヴェドの大公プイスの妻となって息子プレデリを生み、後にスィールの息子マナウィダンと再婚することになる、古老ヘヴェイズの娘リアンノン。彼女の背後には常に古きケルトの馬の女神エボナの影が見え隠れする。登場の際の不思議な馬といい、プイスに与える大食らいの袋といい、何か尋常の力以外の能力を備えた異界の女性である。また「マビノーギの四つの物語」の第四話に登場するアリアンロドは、ドーンの娘。兄グウィディオンとの間で、息子スェウをめぐっての熾烈な魔法合戦を繰り広げる女性である。そして第二話に登場し愛の女神と称される薄幸の美女ブランウェンも、ことさら魔法の力は行使しないまでも、巨人ベンディゲイドブランの妹、れっきとしたスィールの娘である。こう見てくると、カムリに伝えられた神話の影を色濃く残すといわれる「四つの物語」の女性たちは、いずれも特別な能力と素性を誇る女人像となっているのが分かる。この第一グループの物語は、最後には南部のドーン系の神々が、北部のスィール系の神々に対して敗北する形で幕を閉じている。すなわち両家に生まれた若者たち— プレデリとスェウの豚をめぐって始まった争いは、魔法の力に秀でた叔父たちの助力を受けたスェウの勝利ということで、決着がつけられているのである。

さてそれでは、続く第二のグループ、「カムリに伝わる四つの民話」に登場する女性たちの姿はどんなものになっているのであろう。そしてそれ以後、大陸のロマンスものの影響を大いに受けて成立したと思われる第三のグループ、「アルスルの宮廷の三つのロマンス」における女人像はどう変化しているのか。順次、この『マビノギオン』の中の女性たちの姿の変化を追ってみることにしよう。¹⁾

I 「キルッフとオルウェン」の物語の中の女性たち

——ゴレイディズ & ドゲド王の妃（キルッフの継母）& カステンヒンの妻——

第二グループ「カムリに伝わる四つの民話」の話のうち、「スィッツとスェヴェリスの物語」と「ロナブイの夢」の2つの物語の中では、女性たちの活躍は希薄である。しかし後にアーサー王大物語絵巻に発展する、騎士たちと貴婦人たちを束ねる王アーサーの原型となる人物、族長アルスルと彼の戦士たちの登場を告げる最初の物語「キルッフとオルウェン」には、きわめて印象的な女性像が現われてくる。いずれもこの物語の枠をなすと考えられる若者キルッフ²⁾と、巨人イスバザデンの娘オルウェン³⁾を取り巻く女性たちである。

まずアルスルの従兄弟にあたる、主人公キルッフの誕生にかかわって登場するのが、生母ゴレイディズである。ゴレイ (golau) (光) + ディズ (dydd) (日) という名前を持つこの女性は、夫キ

リッツとの間にひとりの息子キルッフを生んだ後亡くなくなってしまいうすい女人である。しかし賢明な彼女は、自分の死に際してキリッツへ一つの遺言を残す。それは自分の墓の上に、二つの頭をもつ茨が生えるまで、次の妃を迎えるのを控えてもらいたいという願いだった。しかし7年の月日が経った頃、この茨は件の二つの花を咲かせ、キリッツ王は再婚することになる。顧問団の助言に従い、キリッツが結婚したのは、ドゲド王の妃である女性であった。夫ドゲドを殺され、無理やりにキリッツの妻とさせられたこの妃には、特別の名前は与えられてはいない。やがてこの不運な女性は、新しい夫にキルッフという息子がいることを知る。そして早速呼びだされたキルッフに、自分の連れ子である娘との結婚を迫るのである。息子は歳がまだ至らぬという理由で、その提案をはねつける。怒った継母は、若者キルッフに、「巨人の長イスバザデンの娘オルウェンをかちえるまでは、どんな女人にも触れることができないようにしてあげます」(159)という呪いをかけてしまうのである。娘の名前をきくやいなや、「体のふしぶしにたるまで、まだ見たこともないこの乙女への愛の思いが満ちていった」(159)というキルッフは、父キリッツの助言に従って、自分の第一の従兄弟にあたるアルスルのもとに向かい、援助を求めるのである。

キルッフの冒険、すなわちまだ見ぬ乙女オルウェン捜しの旅、ひいてはアルスルと彼の戦士たちの活躍を語る物語のきっかけを作るのが、若者の二人の母一生母ゴレイディズと継母ドゲド王の妃であった女性一である。そして彼女たちは、いずれも幸薄い女たちであるということが出来る。一人は如何ともし難い病から、そしてもう一人は人災とも言うべき力によって、無理やりにその運命を狂わされてしまった女たちであるからである。若者の生母にゴレイディズという名前が与えられているのは、後に彼女の妹とされる女性一カステンヒンの妻³⁾一が登場してきて、巨人イスバザデン退治の立役者になる伏線であろうか。

めでたくアルスルの協力を得、後の「アーサー王物語」の中でも大活躍するカイ、ベドウィル等の、それぞれ超人的な力をもつ6人の戦士たちと共に、オルウェン探しの旅に出たキルッフは、イスバザデンのこもる砦の門番カステンヒンのところにやってきて、彼の妻で自分の叔母にあたるこの女性に会うことになる。彼女も姉のゴレイディズ同様、不運な女であった。というのも自分の産んだ23人の子どもを、全て巨人イスバザデンに殺されてしまっていたからである。手もとに残るはたった一人、末の息子だけとなってしまっていた。カイとこの女性の遭遇の際のエピソードも印象的である。大喜びで甥キルッフの一行を迎えに出た彼女の抱擁を避けて、カイが一本の丸太を彼女の両腕の間に差し込まなければ、カイの体は粉々になり、「ほかのだれも、二度と私を愛することができなくなったでしょうな」(178)と皮肉を言われるほどの力持ちの女性なのである。彼女もまた、夫であるカステンヒン同様、怪力を有する女であったことが分かる。そしてこの女性の仲介を得て、一行はめでたく巨人の娘オルウェンと会うことが可能になるのである。

やがて現われた娘オルウェンの美しさを、本文は次のように描写する。

乙女は、炎のように燃える真紅の絹のローブを身にまとい、高価な真珠とルビーの埋め込まれた赤金のトルクを首につけていた。髪は黄色はバナディルの花のそれよりも深く、肌の白さは波の泡よりもさらにさえざえとしていた。両の手と指は、地中からわく泉の中の細かい砂に咲き出る撫子の、その若芽より白く、目は、籠にとらわれた若鷹や三たび羽を換えた雉の、その目よりも輝いていた。胸は白鳥のそれよりも白く、唇は真紅の花よりもなお紅かった。この乙女の姿を目にした者はだれしも、たちまち恋に落ちてしまうにちがいない。乙女が歩みを進めると、その足もとから四つの白いクローヴァの花が咲き出てきた。そのため、乙女はオルウェンと呼ばれていたのがあった。

(179)

乙女オルウェンは、このようなただ単に絶世の美女であったばかりでなく、父である巨人イスバザデンとの間の約束、「自分の同意なしでは去っては行かぬ」という言葉をも守ろうとする、健気な娘でもあった。そして彼女のこの願いを聞き届けるために、キルッフと6人の戦士たちは、巨人の出す39件（または38件）の課題を次々と達成してゆき、めでたく巨人の同意のもとで、オルウェンを妻にかちえるという物語になっている。最後には花嫁の父、巨人イスバザデンは、カステンヒンの24番目の息子ゴレイ（「最高」という意味を持つ）によって首を落とされ、果てることになっている。しかしその最後のさまは潔く、さすが巨人の長と感服させるものでもある。それは次の最後の言葉一つとっても明らかであろう。

「そのことを、わしに感謝せんでもよいぞ。おまえを助けてくれたアルスルに礼を言うがよからう。わしは、自分から進んでそうしようとは思わなかったのだからな。さて、そろそろ命をしんぜる時がきたようだ。」
(214)

敵ながらも天晴れなこの態度をみると、さしものアルスルの戦士たちが、無頼者の一団とも思われかねないほどなのである。

さて若者キルッフと娘オルウェンの恋の話は、このようにめでたく成就することになるのだが、一方アルスルと戦士たちの物語も、巨人イスバザデンの髭剃りのとき使用されるローション、すなわち地獄の高地にある悲しみの谷の突端に住む、白き魔女の娘、黒き魔女の血を手に入れるという課題を達成することにより、終わりを迎える。これはまた、魔女たちに象徴されている、アルスルに敵対する勢力の駆除でもあった。

アルスルは北へ向かい、魔女の洞窟のある地までやってきて、まずカカムリと彼の弟ヘグウィドを、魔女退治に差し向けることにする。しかし彼らは、完全に魔女に撃退されてしまった。次に長身のアマレンと同じく長身のエイディルの二人が洞窟へ遣わされた。やがて彼らは前の二人よりもひどい状態で戻ってきた。最後に、アルスル自身が乗り出すことになる。

それから、アルスルは、洞窟の入り口を取り囲んでしまった。そして、入り口から、自分の短剣カルンウェンハンで魔女に狙いをつけて、体のまんなかになに命中させた。その結果、魔女は二つの切り株のように切られてしまった。
(213)

その後、プリダインのカウが魔女の血を採って持ち帰り、最後を迎えた巨人の髭剃りローションとして使われたのだと物語りは語る。

II 「マクセン・ウレディクの夢」の女主人公

——エレン・ルイダウク（軍勢を率いるエレン）——

この物語は、5年という短い年月ではあったがローマの皇帝を勤めたという、スペイン出身のマグヌス・マキシマス（Maganus Maximus: 在位383-8）という実在の人物を背景に成立していると思われている。その中に、彼が夢の中で見初めるカムリの女性が登場してくる。この幻の美女を求めて、マクセンはルヴァイン（ローマ）から遠くブリテン島へ向かい、当時ローマ人に代わって

セゴンティウム（現在のカナーヴォン）の要塞を守っていたブリトン人の長エウダヴ（Eudaf）の娘エレン（Elen）を見つけ出して、彼女と結婚し、カムリの地に留まったという。エレンは自分との結婚の婚資として、父のためにプリダインの土地とそれに付随する三つの島⁴⁾を、そして自分自身にはアルヴォンとカエル・スィオンとカエル・ヴィルディンの地に砦を築かせたのだった。彼女は後にこの三つの砦を結ぶ「エレン・ルイダウク（軍勢を率いるエレン）の道」と呼ばれるローマ街道、「サルン・エレン」（‘Sarn Elen’）を造った。このようにしてマクセンは7年の間この島に留まったため、当時のローマの規定によって、本国では新皇帝が誕生しようとしていた。しかしこのことに不服を唱えたマクセンは、急遽軍勢をともなって、ルヴァイン目指して出発し、新皇帝に戦いを挑んで、首都ルヴァインを包囲した。なかなかそこを落とすことができずにいたとき、苦境を突破して、見事ルヴァインの攻略に成功したのは、エレンの二人の兄たち、エウダヴの息子ケナンとガディオオンだった。その後二人は、皇帝マクセンの許しを受けて大陸の各地を征服し、男たちを殺し女たちを生かしておくことにして、その勢力を拡大していったという。やがてガディオオンは自らの生まれ故郷へ帰ることを決め、ケナンはその地に残って住み着くことにした。このとき自分たちの言葉（カムラエグ）が壊れてしまうことを恐れた彼らは、女たちの舌をすべて切り取ってしまうことにしたという。こうしてスファダウ（ブルターニュ）の人々の言葉が生まれたとされている。確かにこの時代には、ブリテン島からブルターニュへの多くの移民が行なわれ、その結果として、ウェールズ語と非常に良く似たブルトン語が形成されてゆくという事実がある。またこの「エレン・ルイダウグ」の子孫たちが、マクセンの死後、ふたたびブリテン島に戻り、南王朝の祖となって、北王朝キネツァ（Cunedda）の一家と対立したという歴史も存在している。⁵⁾

ここに描かれているのは、美しく、賢く、そして何よりも強い力を発揮する女性、ケルトの女の典型を示す、エレンという女人像である。彼女は「四つの物語」に登場する女主人公たちとは異なり、さしたる超能力を使うことはないが、もてる美しさと知恵とを駆使して運命を切り開いてゆく女性である。そして、結果的には彼女の活躍によって、周囲の男たちの運命をも変えてゆくといった、たくましいケルトの女人なのである。

Ⅲ 「アルスルの宮廷の三つのロマンス」の中に登場する女性たち

— リネット & イーニッド & etc. —

1. 泉の貴婦人とリネット

『マビノギオン』に収録された、ウェールズに伝わる5つのアルスルの物語のうち、第三話にあたるこの物語は、背景の地がアルスルの宮廷が置かれたとされるカエル・スィオン・ウスクというほかは、一体どこの地で語られたものであるかは定かではない。描かれるアルスル自身にしても、新たに「皇帝アルスル」（‘yr amherawdyr Arthur’）という称号がついていて、前の二つの物語に登場した、荒々しい戦士たちを束ねる族長アルスルの影は稀薄となっている。すなわち彼の姿は物語の前面から消え、騎士たちを送り出しその帰国を待つ、宮廷を構える主人として存在しているに過ぎない。代わって色濃くなるのは、宮廷や槍試合での細々とした作法や、騎士たちの華麗な衣装や武具、壮絶な戦いの描写などである。そんな背景から考えてみても、「三つのロマンス」がもはやウェールズ独自の物語ではなく、遠く大陸へ旅に出たあとで、ふたたびウェールズの地に戻ってきたフランス風のロマンスであることが分かる。

それまでの定石にしたがって、物語はクリドノの息子ケノンの冒険の話に始まり、続いて主人公となるオワイン（Owein）の冒険、そして宮廷から姿を消してしまった彼の捜索に赴くアルスル

一行の旅と、三回繰り返されることになる。

泉を守る黒い騎士との戦いに敗れて、宮廷に戻ってきたケノンの失敗談に触発されるかのように、オワインは冒険に出てゆき、めでたくこの泉を守る漆黒の騎士を打ち倒すことに成功する。しかし、いざ城へと入ろうとするとき、落ちてきた城門に馬をはさまれ、前方と後方を遮断された宙ぶらりんの状態で、立ち往生してしまうのである。その窮地を救ったのが、泉の貴婦人⁶⁾の侍女リネット(Lunet)という娘であった。娘はこのどこからやってきたかも分からない騎士オワインにすぐさま恋をしたように見受けられる。「あなたさまに何かしてさしあげられるならば、女冥利につきるというものですよ。女性にとって、あなたさまにまさる殿方はいでになりますまい。……あなたさまを助けてさしあげられるなら、どんなことでもいたしますわ。…」(250)という言葉どおりに、リネットは懸命にオワインを助けようとする。

オワインの方はといえば、葬式の行列の後を泣きながらついてゆく「この女人の姿を見たとき、体のすみずみにいたるまで彼女への恋の想いがくまなく広がってゆくのを覚えた。」(253)と描かれていて、自分が手を下して未亡人にした泉の貴婦人その人に、すぐに恋をしてしまったのだった。一方リネットは、泉を守る騎士を失った伯爵夫人とオワインを何とかして結びつけようと画策する。自分の夫の黒い騎士を殺してしまった、当のオワインとの結婚を渋る伯爵夫人とリネットの会話が、印象的である。リネットの伯爵夫人攻略の決め手となる主張は、「力ある武人の援助がなければこの所領を保ちつづけておいでになれないことは、あなたさまにもよくおわかりのはずです」(255)という、きわめて実際的なものであった。リネットのこの世俗的な知恵と機転によって、所領の有力者たちと相談の上、夫人はオワインを次なる泉の守り手として選び、彼と結ばれるのである。

三年の歳月が経ったとき、行く方知れずになってしまっているオワインを捜して、皇帝アルスの一行が同じ旅を重ねることになる。最後には、泉の騎士となっているオワインと戦ったグアルッフマイが、ついにこの騎士の正体を見破り、オワインはアルスと共に故郷に帰ってくる。ふたたび三年の年月が経ったとき、アルスの宮廷にリネットが馬で乗りつけ、約束を守らないで姿を消したままのオワインの不実をなじるのだった。オワインは恥かしさに打ちのめされて各地を放浪し、とある伯爵夫人の所有する土地での冒険を重ねる。その冒険も終わったとき、ふたたび放浪の旅に出かけたオワインは、苦境に陥っている一頭の獅子を助け、それ以後決して側を離れようとはしないその獅子と共に旅を続ける。やがて荒野で、あるうめき声を耳にしたオワインは、それがあのリネットのものであることを発見する。姿をくらまして戻ってこないオワインのことを、悪し様に言う侍従たちのあざけりに抗議したため、石の入れ物に閉じ込められてしまい、間もなく殺される運命にあったのである。彼女のための戦いに参加することを約束したオワインは、その晩の宿を取った城の持ち主の伯爵の苦境を救い、翌日には危うく火あぶりにされそうになっているリネットを獅子と協力して救出し、彼女と共に泉の貴婦人の治める国へと帰って行くのである。物語は、「そしてオワインは、夫人を連れてアルスの宮廷へ戻り、彼女が彼の生涯の妻となったのだった」(272)と結ばれている。

しかしどう考えてみても、オワインと泉の伯爵夫人の結びつきは希薄であり、二人の間にはなんらの人格的結びつきはないようにも思われる。すべては夫人の侍女リネットの、自分の女主人である伯爵夫人への忠誠とオワインに対する深い想いがもたらした結果であったからである。にもかかわらず、オワインの結婚相手はあくまでも伯爵夫人なのである。それまでは、二人の男と女の相思相愛による、人格と人格との結びつきを重視していたウェールズの社会におとずれた変化のさまを、如実に見る思いがする。女性が領土である大地の力とその豊穡の恵みを象徴し、男性

がそれを求めて探求を繰り返すという図式は、確かにいままでも物語の背景に存在してはいた。しかしそれがこのようにあからさまな形で、物語の前面に出てくることは皆無だったのである。しかしながらここでは物語が現わすように、皇帝アルスルの騎士オワインの冒険が、女性の所領を手に入れるための冒険の旅に終始していることが分かる。その中では女性のもつ身分と地位が最大の問題とされているのである。このような雅びな貴婦人たちの世界と、彼女たちの与える恩恵を求めての騎士たちの探求のさまを見ていると、たとえ脇役であっても、彼らの側に仕える女たちの、さわやかな無私の生き方が、いっそう輝きを増して迫ってくる思いがする。そして自分の女主人に忠誠をつくし、主人公の騎士たちに純粋な愛を捧げる女人の典型的な一例となるのが、このリネット像なのである。

2. 「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」の中の女性たち

北ウェールズに所領を持っていたエヴラウク伯爵には7人の息子があった。しかしトーナメント試合や戦闘に加わって戦った末、いずれも命を落としてしまい、残るは末っ子の、まだ年端のゆかないペレドゥル⁷⁾だけとなってしまっていた。賢明な彼の母親（名前は与えられていない）は、人けのない荒れ果てた荒野で、心穏やかな者だけを側においてひっそりと平和に暮らしていた。この末の息子だけは、父親や兄たちのように、戦いで命を落としてほしくないと願っていたからだった。

しかし運命の日がやってくる。森の中で偶然に、アルスルの宮廷の3人の騎士たちに遭遇した少年は、彼らが母の言う天使ではなく、騎士と言う身分の男たちであることを知り、彼らの後を追ってアルスルの宮廷への旅に出てゆくことを願うからである。そんな息子の姿を見た母は、幾つかの助言を与えた。すなわち教会を見たら主の祈りを唱えること、食べ物や飲み物を見たら自分のために取っておくこと、叫び声を耳にしたら（ことにそれが女の人のものであれば）すぐにそちらに向かって急ぐこと、美しい宝石を見つけたらそれを取って他の人にあげること、美しい女の方に出会ったらお慕いするのだという助言である。この母の言葉に従って、若者は数々の冒険を重ねる。たとえ素質だけで勝負するような荒々しいものであるとはいえ、戦うところに敵を持たぬと、少年の怪童ぶりが発揮される。そうこうするうち、少年は旅の途中立ち寄った館で、二人の叔父たちから武器の使い方や戦いの作法といったものを学ぶ。叔父の言葉「いまや母親の言葉を離れるときなのだ」（287）が、何やら象徴的な意味をもって響いてくる。母の情愛の中で暮らしていた私的な世界から、より社会に開かれた公的な大人の世界への旅立ちを促す言葉とも思われるからである。少年は旅の途中で、さまざまな美しい女人たちに出会う。不思議なことに彼女たちには、いずれも特別な名前は与えられてはいない。例外となるのは、唐突に現われてくる「黄金の手のアンガラット」や、「クリスティノビルの女帝」などである。しかし彼女たちの物語は一切語られてはいない。またペレドゥルは、さまざまな旅を重ねた末、宮廷と領地を保証する王女との結婚を断り、その代わりに「不思議の城」の情報を求め、黒い男と戦い、彼に勝利し、最後にはアルスルの軍勢がカエル・ロイウ（現在のグロスター）の魔女たちを退治するという事になっているのである。

ここで興味深いことは、「キルッフとオルウェン」の物語と同様に、主人公ペレドゥルは、アルスルと彼の軍勢の助けを借りて、彼が旅の途中で遭遇した盆の上に載せられた血だらけの首一すなわち自分の従兄弟の一人の首一を目撃し、彼を殺した魔女たちを退治して、仇を討つことになることである。本文は、「それから、アルスルと彼の軍勢が魔女たちに襲いかかり、カエル・ロイウの魔女たちは一人残らず殺されてしまったのだった」（344）と結ばれている。ここに登場してくる魔女たちというのは、制度化された社会の組織から逸脱して、常に体制を脅かしていたケルトの自然の

力、呪詛的な力を象徴する存在であるようにも考えられる。

(344)

この物語に登場する数々の女性たちは、英雄の母であるとか英雄の冒険の対象となる女人といったふうに、その役割のみが問題にされていて、特別に彼女たちの人格の有り様は問われない存在である。したがって彼女たちには、名前が必要ではないということなのであろうか。

3. 「エルビンの息子ゲライントの物語」の女主人公

—忍従の妻イーニッド—

エルビンの息子ゲライント⁸⁾は、アルスルの宮廷でもその存在を知られる勇敢な騎士であった。あるとき、王妃グウィンホヴァルの侍女に加えられた無礼の仇をとるために出かけた冒険の旅で、一羽の鷹をめぐってのトーナメント試合に参加し、見事に勝利して「鷹の騎士」となり、インニウル郷の娘イーニッド (Enid) と結婚して、アルスルの宮廷に戻ってくる。やがて年老いた父に代わってその領土を守ることになり、それ以後は妻との安穏な生活にはまって、公の勤めをもおろそかにすることになったのだった。当然彼の怠惰の咎は、妻であるイーニッドにかかってくることになる。ある夏の朝、ベッドで目覚めたイーニッドは、眠られぬまま、太陽の光に照らし出された、傍らで眠る夫ゲライントの美しさと容姿のみごとさにつくづくと眺めいって、「ほんとうに悲しいことだわ。もし、わたくしのためにこの両の腕と胸とが、当然それらのものであるはずの名声と誇りとをなくしかけているのだとしたら」(377)と嘆くのだった。しかし、イーニッドの流した涙によって目を覚ました、ゲライントの中に起ったあらぬ考えが、彼を苦しめるようになる。その考えとは、イーニッドが他の男への愛のことを思って、泣いているのではないかという邪推である。真偽を確かめることもなく、当惑するイーニッドを伴って、ゲライントは旅に出ることを決めた。妻に出した命令は、もっとも粗末な衣服を身に着けてゆくことと、道中どんな出来事に遭遇しても、自分の許しを求めることなしには、声をかけることあたわぬというものであった。

そんな命令にもかかわらず、再三にわたってイーニッドは夫に危険を告知する。それはすべて、夫の身を案じてのことであったのだが、ゲライントは頑なに、妻の善意を認めようとはしない。その様子は、ひとえに、嫉妬に狂って目が見えなくなった夫の愚かさややりきれなさを露呈するものである。またどんなに邪険に扱われても、言い開きをしようもしない妻の姿には、一見被虐的な要素も垣間見る思いがする。美男と美女の夫と妻であればあるほど、その様子は異常である。人はそんなイーニッドの姿に、忍従の妻の面影を見て憐れをとどめるのかもしれない。しかしながら、従来に誇り高く、堂々としたケルトの女人像を見てきたわれわれには、いじましくも勘定高い女の計算さえも見る思いがするの否めない。ゲライントにしても、イーニッドにしても、何故直接相手に対して自分の気持を吐露し、腑に落ちないことがあるのなら、確かめてみることを避けるのであろうか。相手あっての男と女のありようであるから、一方的にイーニッドばかりを責める訳にもゆかないだろう。主人公となる勇者ゲライントの優柔不断さ、だらしなさにも目を覆いたくなるようなものがある。ここにはまさに、ひときわ矮小化された人間の姿が写し出されている。「かつてこの島を治めていたあのようなりっぱな人々に代わって、こんな小さな者たちが島を治めているのかと思うと、つい寂寞の感にかられるのだ」(「ロナヴィの夢」参照(221))という、あのアルスルの皮肉な言葉が蘇ってくる。時代の変化にともない、生来のケルト人の世界が、ノルマン風フランス文化にすっかり飲み込まれてゆく過程が象徴的に示されている。何とも寝覚めの悪い男と女の姿がここに露呈されているからである。

イーニッドには、どんなに命令されたとしてもそれを跳ね除け、説明し、相手に分かってもらう

努力はできたはず。それを阻むのは、一体どんな思惑であったのだろうか。才色兼備と思われるこの賢い女性イーニッドの上には、すでに一途な恋の成就を願って、たった一人馬でこの世にやってくるリアンノンのひたむきさも、自分の誇りを踏みにじられた悔しさのため、わが子にまで呪いをかけるアリアンロドの暗い情念も、自分の生を呪い、悲しみのために心臓を張り裂けさせるブランウェンの深き絶望の影もない。女と男の熱き情念の欠乏は、組織化され、形式化された生を生きざるを得なくなった時代の変化を、象徴的に物語っているのである。すなわち、荒々しいまでに素朴なケルトの心情を、心を溶かすノルマン文化が侵食してゆく過程とその当然の帰結を見る思いがする。

以上見てきた如く、ケルト社会にとっての一番の危機は、力によるアングロ・サクソン支配ではなく、人の心を内面から侵食するような、圧倒的な魅力を持つノルマンの文化の影響力であった。それこそまさに、ほんとうのノルマン・コンクエスト（ノルマン征服）⁹⁾の姿であった。そんな事実を、『マビノギオン』の物語の中の女性たちの変化が如実に示している。

洋の東西を問わず、原始には、男性たちと並んで一歩も引け劣らず、力を振るっていた女性たちの存在があった。多くの場合、彼女たちの司るのは、祝福と呪いといった、呪術の世界である。彼女たちのこのような力を借りずには、男たちがその土地と領土の主権を握ることは不可能とされていたのである。「マビノーギの四つの物語」に登場するリアンノン、ブランウェン、アリアンロドというような女性たちはみな、背景にケルトの神の雰囲気漂わせた、祝福と呪いの女神的女性であった。しかしながら、彼女たちが活躍する魔術的な世界は、時代の変化にともない、急速に縮小されてゆく。社会の組織化が進むにしたがって、理性的で主知的な男性論理の支配する世界へと変化してゆくからである。「三つのロマンス」に登場する女性たちは、いずれも身分的秩序の成立とその中で生きる女性像を示している。そんな中で、彼女たちのもてる特別な能力は恐れられ、忌み嫌われて、魔女という名のもとに厳しい迫害を受けることになった。その迫害は、キリスト教化が進んでゆくに連れ、熾烈をきわめるようになってゆく。それは中世の社会を震撼させた、魔女狩りや魔女裁判の例をとっても、明らかなことである。ケルトの自然宗教を背景にもつ、ウェールズの社会においても、特別な能力をもつ女たちへの迫害は公然と行なわれた。特に薬草（ハーブ）の知識をもつ女たちの存在は、社会で珍重されたという一時期を経て、やがて魔女として危険視され、迫害の対象とされてゆくのである。彼女たちに治癒の力は、その息子たちが引き継ぐことになる。ウェールズの民話の中には、人間の男たちと結婚した妖精の女が、人々にその出自を問題にされ、自分たちの国へ戻ってゆかざるをえなくなり、別れに際して息子たちに、その治癒の力を残してゆくといった話が多く伝えられている。

『マビノギオン』の物語の中では、女たちの力の押さえ込みの話は、アルスルと対決する魔女たちの物語として残っている。前述の如く、「キルッフとオルウェン」の物語の魔女退治には、まだ彼女たちのもつすさまじいまでの力を留めているように思われる。すなわち、

彼らが洞窟に入ると、魔女は二人につかみかかり、ヘグウィドの頭の毛をつかんで床に投げとばし、足で踏みつけた。カカムリは魔女の髪の毛をつかむと、床に投げつけてヘグウィドから離そうとした。しかし、魔女はカカムリに立ち向かい。二人を痛めつけ、武器を取りあげ、金きり声でわめきながら追い出してしまった。(213)

と描かれているからである。

しかしながら、「ペレドゥルの物語」の中に描かれている魔女退治の物語では、彼女たちの力は、著しく弱められてしまっているのが分かる。すなわち、

一人の魔女が、ペレドゥルの前でアルスルの家来の一人を殺し、ペレドゥルはやめるように命じた。もういちど魔女がペレドゥルの前でアルスルの家来を殺し、ふたたび彼はそんなことをしないように命じた。三度目に魔女がペレドゥルの前で家来を殺したとき、ペレドゥルは剣を抜いて兜の頂き切りつけた。すると魔女の兜と鎧と頭はもろにまっ二つに裂けてしまった。彼女は叫び声をあげてほかの魔女たちに逃げるように命じ、<彼女らとともにいて騎士の修行をし、彼女らを殺す>と予言されていたこの男こそこのペレドゥルだ、と言った。(344)

と描かれているからである。

このような語りの違いが、『マビノギオン』の中の女性たちの変化のさまを如実に物語っているように思われる。そこには本来の力を奪われ、弱体化され、矮小化された女性たちの姿がある。そして彼女たちと対置する当のアルスル像の上にも、荒々しい戦士たちを束ねる族長アルスルから、大軍勢を率いる皇帝アルスルへの変化が見られる。やがてこのアルスルが、ウェールズの地を離れ、ヨーロッパ中世の社会できらびやかな宮廷を構え、雅な貴婦人と高德な騎士たちの恋と冒険を見守るアーサー王となってゆくのである。

ウェールズのアルスルの物語には、騎士の中の騎士として活躍する理想の騎士ランスロットも聖杯探求の騎士ガラハッドもいまだ存在せず、したがってグイネヴィア王妃(グウェンホヴァル)とランスロットの、主人アーサーにたいする忠誠と、お互いの間に芽生えた愛とに引き裂かれた、悲痛な恋の話も描かれてはいない。

注

- 1) 使用テキストは、中野節子訳・徳岡久美協力、『マビノギオン』(JULA出版局, 2000)である。()の数字はページを表す。
- 2) キルッフ(Culhwch)とは、「豚の囲い」の意味。オルウェンとは、「足跡」(ol)と「白い」(gwyn)が合わさって、「白い足跡」の意味となる。
- 3) アルスルの母アイグル(Eigr)、キルッフの母ゴレイディズ、そしてカステンヒンの妻は、アンラウド・ウレディクを父とする姉妹どうしである。本来母方の血縁が跡取になるウェールズの伝統から、この名門の出であるカステンヒンの妻の存在を恐れたイスバザデンによって、23人の子どもたちを殺され、その領地を奪われるという災難を被ったと思われる。
- 4) 9世紀の僧ネンニウス(Nennius)の『ブリトン人の歴史』(*Historia Brittonum*)によると、それらはワイト島、マン島、そしてオークニー諸島を指していると考えられる。
- 5) エレンとキネッサ(Cunedda)一家については、私論「ウェールズのアーサーをめぐる(2)―聖人伝の中から」(「大妻女子大学紀要一文系―第32号」) pp. 3-5参照。
- 6) この泉の貴婦人には、13世紀のフランスのクレティアン・ド・トロワ(Chretien de Troyes)のロマンス『イヴァン』(*Yvain*)の中では、ランダクのラウディーン(Laudine de Landuc)という名前が与えられている。
- 7) エヴラウク伯爵の息子ペレドゥルは、後のアーサー王物語の中では、聖杯の騎士の一人パルシヴァル(Perceval)となって活躍する。「黄金の手のアンガラット」を意中の女人とすることを拒まれ、キリスト教徒

とは一言も口をきかないと誓ったため、一時「沈黙の騎士」と呼ばれていたこともある。

- 8) エルビンの息子グライントは、10世紀頃に書かれたと推定される古詩にも歌われる勇士である。現在のデヴォンシャーの出身で、スォングボルス (Llongborth) の戦いでは、アルスルの戦旗を掲げて、サクソン人を相手に勇敢に戦ったことを歌った悲歌も残されている。
- 9) ノルマン征服 (The Norman Conquest) とは、1066年のウィリアム征服王 (William the Conqueror: 1027-87) の率いたノルマン人による、英国征服の事件。

この人物は、「キルッフとオルウェン」の物語の中ではフラインクの王グウィレンヒンとして登場し、この物語の後半で、トゥルッフ・トゥルウィスによって殺されることになっている。歴史的には、この征服王は、1066年からイングランドとノルマンディー地方を治め、セント・デイヴィッツを訪れたのは、1080年のことといわれ、そのあたりがこの物語の成立の時期であろうと考えられている。1087年に、おそらく落馬事故によって、フランスで死亡したと伝えられている。